

自殺予防・相談電話 **こころの救急箱 通信 第22号** 2022年3月

発行：特定非営利活動法人 こころの救急箱 事務局：電話・FAX：06-6942-9092

Eメール cocorono9090baco@kpa.biglobe.ne.jp

URL <http://www.cocorono99baco.or.jp>

相談電話 **06-6942-9090** (月曜日：夜7時～火曜日朝3時 木曜日・土曜日：夜7時～10時)



「聴くこと、寄り添うこと」

関西学院大学 人間福祉学部人間科学科教授

藤井 美和



家で電話を取る、仕事で電話を取る、スマホで電話を取る。取る前から相手は誰か分かっている。電話にはいつも目的がある。これが日常。しかしあえて目的を保留し、相手を確認することなく、ただひたすらその声に耳を傾ける人がいる。

「電話する人」は、孤独の中にいる人、生きるのに疲れた人……。体のいい励ましやアドバイスを求めているのではない。ただ、この苦しみを聴いてほしい。誰にも言えない気持ちを吐き出し、それを受け止めてほしい。心のどこかにそれを期待して、勇気を出して電話する。

「電話を取る人」は、その声にひたすら耳を傾ける。人の苦しみはどんなものであれ、他者が「わかります」などと言えるものではなく、「こう考えてみては？」とアドバイスすることで解決するものでもない。では、なぜ電話を取る人は、今日も耳を傾けるのか。

苦しむ人を前にして、よく耳にするのが「寄り添い」という言葉である。「寄り添うしかありません」「寄り添っていきましょう」と。では「寄り添い」とは何を意味するのだろうか。「寄り添い」が、寄り添うという行為を指すのであれば、寄り添いが「できる、できない」が課題となり、どうすれば寄り添えるのかに焦点が当てられる。しかし、寄り添いは逆説的である。寄り添おうとすればするほど、遠ざかる。なぜなら寄り添いは、「できる、できない」にその本質があるのでなく、寄り添う者が問われることで可能になるからである。

「寄り添い」は問うてくる。あなたは目の前の人を丸ごと受け入れることができるか、と。自分の思いや価値観を持ち出さず、語る人の声に耳を傾けることができるかと。合理的世界観の中で生きる私たちは、すべてに答えや解決策があると思いつむ。しかし人間の存在そのものが揺るがされるような苦しみ(スピリチュアルペイン)に対して、合理的・表面的な答えは無意味である。だからこそ、答えを保留し、人の深い苦しみを分かることなど出来ないという無力を引き受け、その人の声に耳を傾ける。その時、無力という自らの限界を、人間を超えるものに委ねることが求められる。神仏、自然、宇宙、いのちを愛しむ大いなるものに自らの限界を委ねること。それは私たちの目を人間中心の合理的世界観から超越的世界観へ向けさせてくれる。そこに生まれるのが、苦しむ人と共に在ることであり、祈りであり、泣き笑いである。